

すれ違い

中町 礼願

大学三年の冬休み。札幌駅は雪化粧だった。見送りに来てくれる予感があったものの、時間には限りがあった。それで前夜に手紙を書いた。来てくれた人に託せるように長い文章をしたためたのだ。

案の定、彼女は間に合わなかった。見送ってくれた女性に手紙を預かってもらい、特急に乗り込んだ。自分としてはこのタイミングしかないと思い、気持ちを手紙の中に詰め込んでいた。これを目にするのはいつのことだろう。何となく今日のうちに読んでくれる気がした。

やがて冬休みが終わって教室に行くと「手紙ありがとう。読んだわ」と言われた。自分は恥ずかしくて曖昧なリアクションに終始してしまった。あの時にもう一言押ししていればと、四十五年経っても思うことがある。その彼女は私が乗った特急が発車して三分してホームに来たのだ。そこで託された手紙を受け取ったのである。

さて、それ以降の二人の関係はどうなったのか。お察しの通り結ばれることはなかった。

卒業の日も札幌駅のホームは雪が降り積もっていた。そこで涙の別れをむかえたのである。

一年経ち、彼女が上京したおり、銀座の和風ランチ懐石を食べながら、少し大人になったお互いを確認し合った。二人ともビジネスのスタイルで環境の変化が一目瞭然なのに、一言二言話すうちに一瞬で学生時代に戻れることを実感した。一方で、こうして会うには大変なエネルギーを要することも理解していた。

結局、そこでも言葉が足りなかった。自分がどうしたいのか明確に意思表示すれば将来が変わっていたかも知れないのに、一歩踏み出す勇気がなかった。

更に二年後、彼女は雨の中を上京して来た。東京駅で待ち合わせて鎌倉に向かった。雨の紫陽花寺や縁切寺は六月にしては気温も低く、互いの温もりを確認するには傘が邪魔した。

本来なら野点傘の下の緋毛氈に腰かけて善哉と抹茶（おうす）でもいただきながら語

らいたかったのに、篠突く雨は容赦しなかった。彼女の足元は叩きつける雨の跳ね返りで汚れてしまっていた。仕方なく暗い茶室に逃れて一時を凌いだ。

東慶寺では絵馬に『今日の再会がもう少し早く実現していれば……』と認めた。彼女はなんて書いたのだろう。確認する勇気はなかった。

それから彼女の足元を気遣いながら長谷観音に辿り着いたころ、雨が上がった。冷え切った体を暖めたくて邪宗門に入った。ここではいつもココアを頼む。テーブルに置かれたノートに綴られた青春の数々を捲ってみる。しかし、今日の二人の再会を綴るには結末が過ぎた。

江ノ電の由比ヶ浜駅で結婚することを伝えた。気丈にも彼女は「やっぱり。そうじゃないかと思った。なかなか言い出せなかったのは貴方の優しさだと分かった。私も最近プロポーズされたの。でも断っちゃった」

硬い笑顔の裏に言い知れぬ悲しさが宿っていた。それから彼女はお見合い結婚するま

で八年の歳月を要した。

幾つかのすれ違いと言葉足らずが異なる人生を歩ませた。甘酸っぱい思い出として片付けられない十字架を背負っている。

こんな小説を書いてみたくて、いつもノートパソコンを持ち歩いている。

三十一年ほど勤めた会社の役員を降りたことで、六十五歳を待たずにフライング退職。それでしたためたのが『ひび割れた社長の器』である。二年ほど前に書き終えたが、本にするには様々な制約があった。それでも出版社の励ましもあって校了したのだが、少しの後悔を伴うものの今は出して良かったと思っている。

出来上がった本の帯には少々デフォルメされた広告が出ている。これが今は足かせとなって、次を出しにくくしてしまった。

アマゾンでは一時的に品切れ状態と言われ、嬉しい悲鳴をあげたものの、楽天や蔦屋オンライン、紀伊国屋オンラインなどでは買えるらしい。

本が売れなくなったと言われて幾久しい。有名な作家さんでも初版は四千部程度らしい。全国の書店に平積みされるには一万部は

最低発行されなければならぬらしい。翻訳本を出版されている諸先輩は当然ご存知のことだが、不特定多数の方々の目にとまらないうち中々重版はかからない。新型ウイルス蔓延の影響で書店に足を運んでくださる方の数は激減している。一方でネット通販を利用しての購買意欲は増大しているようだ。

自分の本はどれほどの方の目にとまるのだろうか。書店に行つて売れ行きを確認したり、どこに行けば売っているのか調べてみたりが、現時点ではそれもままならない。

それでも反響はあった。本の中にも登場した八十五歳の大先輩が、自分も書いてみたくなつたと仰つて下さつた。身近な人間が本を出版したというのは、それなりの刺激にはなつたようである。

誰の人生にもドラマがあり、伝えたいエピソードがある。それを文章にするのは、それなりに気力を要するものだ。

私は高校時代に同人誌を発行した経験がある。その時は四人の仲間とガリ版印刷を行つたのだが、一人は他界し、あとの二人は音信不通となっている。

あの頃のペンネームも掲載したタイトルも覚えていない。桐生の街を愛してくれた坂口

安吾や太宰治を気取つて喫茶店にたむろしたのが懐かしい。

そして二十代のころには童話を書いて懸賞に応募した。残念ながら佳作に留まつたものの、その時のタイトルが『さよならの雪化粧』である。ラストは前述のような駅での別離だった。寸評には「是非大人の小説としてリメイクして欲しいものだ」と記されていた。あれから頭の片隅に残っていた小説への思い。今回少しだけ叶えたことになるのだが、商売としての出版に手足を縛られてしまつた自分が、今後物語を綴ることが出来るのか。甚だ自信はないが、この度、先輩の有難いお誘いをお受けして投稿させていただくことになった。

これを機会に次の意欲を奮い立たせたいものである。

最後に拙著を手にとつて頂いた皆様に感謝申し上げますと共に、この七月には電子書籍化が決まったことをご報告申し上げます。

(了)